TALK & TALK

トーク&トーク

玉名よろこび会代表
下川冨士子さん

捨ててしまうものを使って生活の場を明るくしよう

シャツや毛糸を使ったお人形、色とりどりの布を組み合わせた玄関マット、上品なブラウスは着物の生地――。古布に新しい生命を与え、よみがえらせるリフォームは、有効な資源の活用方法の一つです。

今回は、玉名市を中心にリフォーム活動をされている下川冨士子さんに、リフォームの楽しさ、活動グループ「よろこび会」などについてお話を伺いました。

R E・F O R M

――リフォームを始められたきっかけは何ですか。

昭和四十七年と五十五年にオイルショックがありましたね。あの時、「使い捨ての時代というのは必ず終る」という何か信念みたいなものが生まれ、持っているものを大事に使う必要性を感じました。そこで、もともと好きだった和裁や洋裁、編み物・手芸などの技術を総合的に生かすリフォームを考えついたのです。捨ててしまうものを使って生活の場を明るくしよう、というのが基本です。刺子のふきんや玄関マットなど生活に密着したものから衣類まで、いろいろ制作しています。

私は常に資源を大切にといっています。それは着ない衣類などを大事にしまいこんでいることとは意味が違います。そういう衣類は、次の世代の人は使いませんよ。だから、今それを生かして自分で着たり、生活を潤すものに作りかえたりするといいじゃないか、と思うんです。

――「よろこび会」というのは、どういう会ですか。

潤石（うるいし）地区を中心に、大体玉名市一円、私がリフォームを教えている人たちの会です。始めて十年ほどになります。

皆さん、タンスの中に古いものを大事にしまってられるでしょ。それこそ明治時代のものまであったりですね。でも、そういうものをタンスごと焼いてしまった、とか、捨てきれなくてどうしようもない、とか聞くんですよ。困って相談に来られる人もいます。

「それじゃお手伝いしましょう」と、この地域の婦人会を主体にリフォーム会を開いたんです。その後ずっと続いていまして、作品展などもしています。そうすると作品展を見られた人たちが、私もやりたいといわれて、玉名市一円に広がったんです。現在、三十名ぐらいですね。

――「よろこび会」の名前の由来を教えて下さい。

私が教えている人の中には、かなり高齢の方もいらっしゃいます。その人たちが、「これが私の生きがいになりました」「みんなと話したり、夢中になって作れるのが楽しい」と言って下さるんです。昔の思い出深い品、もう捨てるしかないかなと思っていた品を活用することで新しいものになる、また別の形で使える。そういったことに「よろこび」を感じられるのでしょう。

それで、みんなの生きがい、うれしさ、よろこびの場という意味で「よろこび会」と名付けました。

メンバーのみなさんはとっても明るいんですよ。楽しみながらリフレッシュできるからではないでしょうか。リフォームの話題だけではなく、講演を聞いた話、料理のアイデアなどさまざまな話が飛びかっています。リフォーム活動のつながりだけにとどまらない〝人の輪〟があります。今度「よろこび会」の中に俳句の会もできました。リフォームをしながら俳句の話をしたり、「よろこび会」の輪が人の輪、文化の輪と大きく広がっていくようです。

これからもどんどんリフォーム以外の活動も計画していこうと思っています。

――昨年の県民文化祭イン玉名で「しらさぎ幻想曲」の衣装を制作されたそうですね。

「よろこび会」のメンバーにも応援してもらい、私でよければ、とお手伝いしました。子どもの下着から猟師の靴まで全部デザインして作ったんですよ。一番苦労したのは時代考証でしたね。大変でしたけど、文化祭のメインの舞台衣装を制作することで私たちも地域文化の向上に参加でき、とてもよかったと思います。これからも何らかの形で、地域の文化活動に参加していきたいですね。

私たちは、リフォーム制作のとき、絶対に新しく買ったものは使いません。「捨てればゴミだが、生かせば資源」。これからも仲間と一緒に、もっとリフォーム文化を地域に浸透させたいと思っています。

下川冨士子さん

昭和11年、玉名市潤石（うるいし）に生まれる。自衛官である夫の政彦氏の転勤で、30年間に20回転居。その先々で和・洋裁、手芸、編み物教室に通い、それらの技術を総合して布類を中心としたリフォームを始めた。10年前玉名市に戻ってから本格的に教室を開き、近所の人たちにボランティアでリフォームを教え始める。